淀川流域における外来魚類の生息状況

○川瀬成吾・石橋　亮・内藤　馨・山本義彦（大阪府立環境農林水産総合研究所）・
鶴田哲也（大阪産業大学）・田中和大・木村亮太・小西雅樹（近畿大学）・
上原一彦（大阪府立環境農林水産総合研究所）

【背景と目的】　淀川流域は天然記念物のイタセンパラやアユモドキ，固有のヨドゼゼラやヨドコガタスジシマドジョウをはじめ約 50 種類の純淡水魚が自然分布する日本でもっとも淡水魚類相の豊かな地域の 1 つである．しかし，2000 年以降，当流域でオオクチバスやブルーギルなどの外来魚類が増加し在来魚類群集に甚大な被害を与えている．そのため，イタセンネットや水生生物センター，国土交通省などが城北ワンド群を中心に外来魚対策を行なってきた．その結果，一部地域で外来魚類は減少し，一定の成果が上がっている．しかし，近年，当流域で特定外来生物のコクチバスが初めて採集されるなど，新たな脅威が現れている．このように淀川流域ではいまだ外来魚類の影響を無視できない状況であるが，現在まで当流域にどのような外来魚類がどのように分布しているかまとまった報告は存在しない．そこで，演者らは，野外採集調査と文献調査に基づいて，淀川流域における外来魚類の分布と生息状況を明らかにしたのでここに報告する．

【材料と方法】　2008 年から 2014 年にかけて，桂川，宇治川，木津川を含む淀川流域計 129 地点でタモ網，投網による，また 2012 年・2014 年に淀川の本流およびワンド域のそれぞれ同地点計 88 地点で地引網による採集調査を行なった．遊漁者からの情報については演者らが直接確認したものに限り採集地点に含めた．外来魚類の出現傾向を把握するために，採集地点を河川本流（淀川・桂川・宇治川・木津川），ワンド・タマリ・二次流路，支流，水路の 4 つの環境に分けた．また，文献調査によって，導入時期や経緯，分布域の変遷，生息現況について考察した．

【結果と考察】　採集調査の結果，12 種の国外外来魚と 2 種の国内外来魚が記録された．出現頻度はオオクチバスでもっとも多く 102 地点，続いてブルーギル 99 地点，カダヤシ 24 地点となった．近年，淀川流域への侵入が確認されたコクチバスやチャネルキャットフィッシュ，また，これまで淀川流域で記録のなかったアリゲーターガーやカラドジョウが採集された．外来魚類の出現率を環境別に見てみると，河川本流ではブルーギルがもっとも高く 58.2 %，ワンド・タマリ・二次流路ではオオクチバス 88.1 %，河川支流ではオオクチバス 19.0 %，水路ではカダヤシ 26.8 %となった．一方，文献調査では，採集調査で確認されなかった国外外来魚 4 種，国内外来魚 2 種の採集記録を得た．

以上から，分布地点の多さ，出現率の高さから引き続きオオクチバス，ブルーギル，カダヤシへの対応を継続する必要があると考えられた．一方，新たに確認されたチャネルキャットフィッシュ，コクチバス，アリゲーターガー，カラドジョウについては，分布域が広がっていない今のうちに駆除対策を行なう必要がある．